「心理学研究」誌における「性別」の取り扱いについての予備的研究

西尾　優希 *・李　美　蘭 *・遠藤　裕乃 **

本研究の目的は，日本心理学会の学会誌である「心理学研究」誌における「性別」の取り扱いの現状を批判的に検討することである。「心理学研究」誌90巻（2019年）から92巻（2021年）に掲載された論文124本を対象とし，①サンプルに関する「性別」の記載の仕方，②解析や結果および考察での「性差」や「性別」の影響について言及の有無，③「性別」に関する用語の順番，④gender/sexの用語の用いられ方を調査した。その結果,①ノンバイナリーなど多様な性に関する項目を含んだ論文は皆無,②考察等で「性別」や「性差」について言及があった論文は44本（約35％），③「女性」が先頭に記載された論文は12本（約10％),④「gender」または「sex」という用語が使用された論文は6本（約5％）であることがわかった。今後の課題として，心理学研究において「性別」を問うことの目的を明確にし，性別二元論に拠らない研究方法を検討する必要性が指摘された。

キーワード：「心理学研究」誌，性別二元論，ノンバイナリー，ジェンダー /セックス

はじめに

人々を性別二元論により明確に分けるという社会の考え方により，性的マイノリティの人々が困難な状況に直面することが多く（河口，2017），性別二元論が差別や人権侵害をもたらしているという認識が広がってきている（高橋，2022）。

実際、複数の自治体において性別記載欄の見直しが実施されている（河口，2017；織田，2020）。内閣府（2022）もジェンダー統計の観点からの性別欄検討のワーキンググループを発足させ，「ジェンダー統計の観点からの性別欄の基本的な考え方について」発表している。この発表の中で，男女別のデータの重要性が触れられる一方で,「性別欄が存在することでハラスメントや差別に通じる困難に直面する人たちの存在を理解し，配慮すること」の必要性が指摘されている。このことから，行政において性別欄や性別二元論に関する見直しの検討が開始されつつあるといえる。

内閣府の提言に対しては，LGBT法連合会（2022）が声明を発表し，トランスジェンダー等がハラスメントや差別に遭う可能性を記載したことなどに一定の評価を示した。一方で，適切な質問項目や選択肢が示されなかったことに課題があることも指摘している。

さて，心理学における「性」の取り扱いについても関心が高まっている。例えば，順天堂大学が医学部入学試験において，不正に女性の得点調整を行った根拠として心理学研究を引用したこと（朝日新聞，2018）に対し、心理学者有志により抗議の意見表明がなされている（Miura et al.，2018）。さらに，日本心理学会の発行する『心理学ワールド』で女性脳や男性脳といった心理学の誤用についての問題提起が行われ（四本，2022），日本心理学会第86回大会で『性に関する研究成果の、社会への適切な発信を考える』というシンポジウムが企画されるなど，心理学においてどのように「性」を取り扱い，社会に伝えるのかが課題となっていることがうかがえる。

そして，これまでの心理学研究において性別二元論による分析が慣習的に行われてきたことへの批判がなされている（上瀬，2018；松並，2018；

*　兵庫教育大学大学院学校教育研究科
**　兵庫教育大学

Morgenroth & Ryan，2018；Hyde et al.，2019；日本心理学会，2021：Schudson，2021；赤澤，2022；湯川，2022）。日本心理学会も『心理学における多様性尊重のガイドライン第1版（草案）』を発表し，心理学研究において「少数者への無配慮が維持・強化されてきた」ことを指摘する。このように，心理学においても性別二元論が疑問視されるようになっており，研究の問いや研究手法などに大きな変革が迫られている（青野・土肥・森永，2022）。

本研究では，第一に，「性別」の取り扱いに関する議論を整理する。第二に，日本心理学会の学会誌である「心理学研究」誌を「クィアする」。「クィアする」とは，「ある事柄にまつわる言説が依拠しているさまざまな規範を問いなおし，脱中心化していくことで，新たな思考を形成していこうとする営み」（飯野，2007）である。すなわち，その実践は，規範によるカテゴリー化や二元論を瓦解させようという指向性をもち，異性愛／同性愛，男／女，白人／非白人などのさまざまな二元論的思考それ自体を疑問視し，問題化していく（河口，2003）。そして，「心理学研究」誌における「性別」の取り扱いについての現状を概観し，今後の課題を展望する。

性別二元論という問題

性別二元論の問題が指摘されて久しい。一方で，学校における男女別の制服，トイレ，性別欄など人々を二分に分ける力は現在も強く作動している。

しかしながら，インドの「ヒジュラ（Hijura）」やハワイの「マフ（Mahu）」，北米先住民の「ラマナ（Lhamana）」など，世界では既に二元的性別概念を超越する存在が知られている（東，2017）。とくに近年，諸外国において「ノンバイナリー（nonbinary）」の人々の認知度が増しつつある。ノンバイナリーとは，女性・男性のようなバイナリーのどちらか一方にとらわれない全てのジェンダー・アイデンティティを指す言葉である。ノンバイナリー以外にも，時に応じてジェンダー・アイデンティティが変わり得る「ジェンダーフルイド（genderfluid）」やジェンダー・アイデンティティとジェンダー表現が社会から期待されているものとは異なる人々を包括する「ジェンダー・ノンコンフォーミング（gender-nonconforming）」など，性別二元論に収まらない多様な性のあり方が存在する（Young，2019/2021）。実際に，オーストラリアやネパール，ニュージーランド，ドイツなどの諸外国において，パスポート等で女性・男性以外の性別を選択することが可能となっている（Seager，2018/2020）。しかしながら，多くの心理学研究においてトランスジェンダーやノンバイナリーの人々が，ジェンダーに関する考察から無視，あるいは切り離されてきたことが指摘されており（Hyde et al.，2019），心理学研究においても大きな変革が迫られている（青野・土肥・森永，2022）といえる。

一方で，とりわけ日本では「Xジェンダー」が知られている。Xジェンダーとは，1990年代後半から2000年代前半に関西の当事者コミュニティで用いられるようになった女性・男性に当てはまらないと自認する人々のカテゴリーである（Dale，2013）。しかし，Xジェンダーに関する研究は非常に乏しく（山田，2019），男女に当てはまらない性自認の表現が社会的に可視化される必要性が指摘されている（武内，2021）。

ところで，Butler（1990/2018）は「強制的で自然化された異性愛制度」は，「二元的なジェンダーを必要とし，またそのようなものとしてジェンダーを規定していく」という。すなわちButlerは，女と男というカテゴリーの差異化が，「異性愛の欲望の実践をとおして達成される」こと，言い換えるならば，「女/男」の二つの項に性別を分けることがそのカップリングである異性愛を自然化する装置だということを明らかにしたのである（藤高，2022）。したがって，「二元論的なものとしてジェンダーを自明視すること」は，「異性愛規範を温存することになってしまう」（藤高，2018）。このように，性別二元論を用いることで異性愛規範が前提となり，それはすなわち同性愛などの多様なセクシャリティの抹消につながって

しまう。

まとめると，女と男に二分しようとする性別二元論は，実際には性別二元論に収まらない多様な性の存在を排除することになる。湯川（2022）は，心理学研究においても,「多様な性についての事実を受け止め，理論や研究に積極的に取り入れ，性別二元性原理からの脱却を図るべき」と指摘する。

セックス（sex）とジェンダー（gender）

WHO（2011）の定義によれば,セックスは「生殖器官，染色体，ホルモンなど男性と女性で異なる生物学的,生理学的諸特徴」を指し,ジェンダーは「規範，役割，女性や男性のグループ間の関係など社会的に構築された女性や男性の諸特徴」を指すという。すなわち，セックスは性別についての生物学的性質，ジェンダーは性別についての社会文化的な性質を意味していると考えられる。

セックスは，例えば「身体的性別は女性」「身体的性別は男性」というように質的に捉えることが一般的であるが,ホルモンや性染色体など量的・連続的に捉えるものもある（佐々木，2017）。例えば佐々木によると，エストロゲンやアンドロゲンは性別に関係なく分泌されており，その量的バランスには個人差がある。性染色体もXX典型女性型とXY典型男性型だけでなく，さまざまなパターンが存在する。このように，性別を決定する生物学的仕組みは複雑で，単純に二分することはできないと考えられるようになってきている（高橋，2022）。

ただし，近年セックスについて「女性も男性もそれぞれ様々な体の状態がある」と表現されることが多い（e.g.坂井，2022）。つまり，基本的にはセックスを二分として考え，その中の個人差を強調することが提案されており（ヨ，2019），注意が必要である（島袋，2022）[1]。また，トランスジェンダーの文脈では，セックスや生物学的性は,「（出生時に）割り当てられた性（sex[gender] assigned at birth）」と呼ばれることが多く（町田，2022），この点も注意を要する。

ところで，1970年代まで，英語で性別を表す語はセックスのみであり,「女らしさ」や「男らしさ」などがすべてセックスに還元され，非常に強い社会規範として作動してきた。しかしながら，第二波フェミニズム運動の展開に伴い，社会文化的性質を含意する性別概念としてのジェンダーが誕生した（江原，2008）。心理学領域においても，伊東（1995）はPsyclitを用い1974年までから1993年までの文献検索を行った結果，1990年を境に「genderおよびgender difference」の件数が「sexおよびsex difference」の件数を上回ったことを報告しており，心理学領域におけるジェンダー概念の波及が指摘されている。

このような第二波フェミニズムやジェンダー概念原点には，Beauvoir（1949/1997）の哲学的論考がある。Beauvoirは『第二の性』において「人は女に生まれるのではない，女になるのだ」と断言し，女性が社会的文脈によって形作られることを指摘した。そして,これはセックスに対するジェンダー概念誕生の契機となった。

しかしながら，90年代以降のフェミニズム理論は，こうしたジェンダー概念をも批判する。Butler（1990/2018）は，Beauvoirのセックスとジェンダーという区別を反駁し，以下のように述べている。

> 「そもそも，『セックス』とはいったい何だろうか。それは自然なのか，解剖学上のものなのか，染色体なのか，ホルモンなのか。……セックスの自然な事実のように見えているものは，じつはそれとは別の政治的，社会的な利害に寄与するために，さまざまな科学的言説によって言語上，作り上げられたものにすぎないのではないか。セックスの不変性に疑問を投げかけるとすれば，おそらく『セックス』と呼ばれる構築物こそ，ジェンダーと同様に，社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは，つねにすでにジェンダーなのだ。そしてその結果として，セックスとジェンダーの区別は，結局，区別などではないということになる。」

すなわち，Butler（1990/2018）は，セックスそのものが「ジェンダー化されたカテゴリー」であり，ジェンダーは「それによってセックスそのものが確立されていく生産装置」であることを暴いたのである。それは言い換えるならば，セックスが決してそれ自体として存在するのではなく，社会・文化的に形成されてきた学問や科学領域の活動により，初めてセックスとして認識されること（江原，2008），つまり，客観的事実を記述していると思われる「科学的」言説自体が，イデオロギー的な男女の二分法の「偏見」に染まっており，したがって，社会・文化的な性差であるジェンダーによって「二種類の身体」という虚構が作り上げられていることを示したのである（竹村，2000）。

心理学研究における「性別」の取り扱い

セックスやジェンダーをめぐって議論を展開するフェミニズム／クィア理論に心理学者はほとんど参加していない（青野，2004）。

一方，女性と男性で異なるという思い込みの多くが，性別やジェンダーに関する科学的研究からもたらされたものであり（Caplan & Caplan, 2009/2010）[2]，とくに日本語における「性」という言葉が多義的であること（青野，2022a）や，セックスはすでにジェンダーであるという指摘（Butler，1990/2018），ならびに実生活上においてセックスとジェンダーという概念を明確に区別することは容易ではないこと（風間，2018）からも，心理学研究において安易な性の取り扱いには注意が必要である（高橋他，2015）。

しかしながら，現実に性差別，性抑圧，性別役割分業に改善が見られない中，その是正に「ジェンダー」という分析ツールは手放せない（高橋，2022）。一方で，ジェンダーの概念は，性別二元制を暗黙裡に内包しているという指摘もあり，「多様な性」を当然とする発達理論を構築する必要がある（湯川，2022）。

国内では，鈴木（2006）が，「定義」の観点から，「ジェンダー」を調査に用いる際のわかりやすい説明と明確な操作的定義の作成が必要であると指摘している。とくに心理学研究において性差が実際以上に強調されていることに対して，性差について分析をする場合には，その意義や意味を明らかにする必要があるとしている。Hyde（2005）は，46のメタ分析を行った結果，女性と男性がほとんどの心理学的変数において類似していることを明らかにし，性差を過度に強調することに警鐘を鳴らしている。また，ヒトの脳の性差は女性脳，男性脳という2つの差を生み出すほど大きくはなく，ほとんどの脳が男女でモザイク状であり（Joel,2011），ジェンダー差に関する心理学的研究も，性別二元論を覆すような女性と男性の類似性の根拠を大量に示している（Hyde et al.，2019）。

一方で，森永（2006）も，性差分析についての注意を促し，ジェンダー概念が広まった後でも，生物学的な要因と社会的な要因が交絡することに研究者自身が気づきにくくなっていることを指摘している。

湯川（2022）は，多様な性の様態を念頭に置いた概念であるセクシャリティを要とし，セックスとジェンダー概念をセクシャリティとして統合することで，多様な性を前提とした研究パラダイムの策定を提案している。具体的には，性という要因は独立変数，従属変数のどちらにもなり得ることを前提にし，性という要因についての仮説と，その意味や解釈を明確にしたうえで研究デザインに組み込むべきことを提案している。しかし，本格的な検討は今後の課題となっている。

APA（2010/2011）は，集団を列挙する際に，社会的優位な集団を先頭に配置しないように注意を促している。つまり，研究参加者を「男性・女性」のように記載することで，男性の優位性が暗に意味される可能性を指摘している。また，人種やジェンダー・アイデンティティ，性的指向などすべてを報告に含める必要はなく，研究に必要な関連した特性のみを記述することとしている（APA，2022a）。さらに，sexとgenderという用語を混同せず使用し，仮に生物学的要因と社会文

化的要因が明確に区別できない場合は，両方の要因について考察するよう述べている。また，研究参加者のジェンダー・アイデンティティに関する情報を明確に示し，研究参加者がシスジェンダーであることを前提としないよう強く勧めている。そして，他の性別を示す際に,「異性」という用語を使用し，暗に性別二元論を示さないよう注意を促している（APA,2022b)。

Morgenroth & Ryan（2018）は，Butler（1990/2018）の思想をジェンダー研究にとり入れる提案を行っている。具体的には，ジェンダーを独立変数として用いるのではなく、従属変数として扱う必要性や，ジェンダーに関するさまざまな選択肢を用意すること,「彼女(she)」や「彼(he)」のような二元的な表現ではなく「彼ら(they)」のようなジェンダー・ニュートラルな表現の使用を提案している。また，ジェンダーの選択肢に関して「その他」という項目は，差別的印象を与える可能性があり，使用しないことを推奨している。

Hyde et al.（2019）は，ジェンダーとセックスが相互に影響しあっていることから，ジェンダーを考慮しないセックスの研究や，セックスを考慮しないジェンダーの研究は不可能であると指摘し,「gender/sex」という用語を用いることを提案している。これは，日本語の「性別」という言葉が多義的であることを考えると有用な提案である可能性がある一方で，筆者らの探す限り，研究協力者が性のどの要因を想定して「性別」を回答しているのかについて調査を行った報告はなく,「gender/sex」が「性別」という概念をどの程度的確に表しうるのかはさらなる検討が必要である。さらに，Hyde et al. は，ジェンダーについて研究協力者が自身の言葉で自由記述する回答法も提案している。

人口学領域において，Hiramori & Kamano（2020/2021）は，大阪市民を対象とし，日本の文脈における性自認と性的指向のあり方（SOGI）の測定に関する調査を行っている。その結果，性的指向アイデンティティについては6つの選択肢からなる問いが，トランスジェンダーか否かについては3ステップ方式による問いが提案されている（Table1)。湯川（2022）は,「多様な性」の発達理論を構築するためには，心理学だけでなく関連領域との協働・融合的研究の必要性を指摘しているが、Hiramori & Kamanoの提案が，心理学領域おいても有用であるのか今後さらなる検討が必要である。

このように，心理学における「性別」の取り扱いについては議論の途上にあるが，心理学は「人の多様性を十分に検討し，全て人権が尊重される

Table 1　性自認と性的指向のあり方（SOGI）の測定について

性的指向アイデンティに関する設問	・次の中で，あなたのもっとも近いと思うものに○をつけてください。（○は１つ） 1　異性愛者，すなわちゲイ・レズビアン等**ではない**［異性のみに性愛感情を抱く人］ 2　ゲイ・レズビアン・同性愛者　［同性のみに性愛感情を抱く人］ 3　バイセクシュアル・両性愛者　［男女どちらにも性愛感情を抱く人］ 4　アセクシュアル・無性愛者　［誰に対しても性愛感情を抱かない人］ 5　決めたくない・決めていない 6　質問の意味がわからない
トランスジェンダーか否かに関する設問	・あなたの性別に○をつけてください。［出生時の戸籍・出生届の性別］（○は一つ） 1　男　　2　女 ※「出生時」とは，生まれたときにもっとも近い時点をさします。 ・あなたは今のご自分の性別を，出生時の性別（上で○をつけたもの）と同じだとととらえていますか。左側で2や3に○をした方は，今の認識をお答えください。 （○はいくつでも） 1　出生時の性別と同じ 2　別の性別だととらえている 3　違和感がある 今の認識に最も近い性別（○は1つ） 1　男　3　その他 2　女　　［具体的に：　　］

Hiramori & Kamano（2020/2021）より作成

よう細心の注意を払い，多様な個人の尊厳が守られる社会基盤に貢献する必要がある」（日本心理学会，2021）。今後さらなる議論が求められる。

目　的

人種や国籍，年齢，職業など人を分類する方法は数多くあるが，性別は最も優先されるカテゴリーである（青野，2022b）。しかしながら，安易な性の取り扱いについては注意すべきであり（高橋他，2015），とくに性別二元制が差別や人権侵害をもたらしているという認識が広がってきている（高橋，2022）。したがって，心理学においても「多様な性についての事実を受け止め，理論や研究に積極的に取り入れ，性別二元制原理からの脱却を図るべき」（湯川，2022）である。しかしながら，そもそも近年の心理学の研究においてどのように「性別」を取り扱っているのかに関する報告はなされていない。

本研究では，日本心理学会の学会誌である「心理学研究」誌をクィアし,「心理学研究」誌において，どのように「性別」が取り扱われてきたのか批判的に検討する。そして，心理学研究における「性別」の取り扱いについての現状を概観し，今後の課題について展望する。なお，本研究では速報性の観点から，現状の課題を概観することを目的とし,「性別」の取り扱いについて包括的な提言を行うことは目的としない。

方　法

「心理学研究」誌90巻（2019年）から92巻（2021年）に掲載された論文146本のうち，展望論文など人を対象としない論文および特定の「性別」のみを対象とした論文を除外した124本を対象とした。そして対象となった論文の，①サンプルに関する「性別」の記載の仕方，②解析や結果および考察での「性差」や「性別」の影響について言及の有無，③「性別」に関する用語の順番，④gender/sexの用語の用いられ方を調査した。

結果と考察

結果をTable2およびTable3に示す。

サンプルに関する「性別」の記載の仕方

「性別」の記載が「女性・男性」のみの記載の論文は全体の約65％であった[3]。一部内訳の記載のない論文もあり，それを含めると，男女以外の「その他」や「不明」などの記載があった論文は，全体の約3割であった。どのような項目により尋ねたのか記載がないため,「女性」「男性」と自認するサンプルのみであった可能性や研究者が「男女」のみしか聞いていない可能性が考えられる。今後は心理学研究が性別二元論に加担しないためにも，どのような項目で「性別」を尋ねたのか記載する必要性があると考えられる。

また124本の論文を通してノンバイナリーなど多様な性に関する項目は皆無であった。一方「その他」や「不明」という項目が見られたが，何をもって「その他」や「不明」とされているのかは記載がなかった。「その他」「不明」とした根拠について，たとえば「無回答」「読み取り困難」と記載する必要がある。また，ノンバイナリーなどに関する項目がなかったことは，心理学研究でトランスジェンダーやノンバイナリーの人々が除外されてきた（Hyde et al.，2019）ことを裏づける結果である。

さらに,性別が「不明」と記載されているデータを表では説明もなく除外する論文が見られた

Table 2
「心理学研究」誌における年度別「性別」の取り扱い

	総論文数	対象論文数		「性別」について 男女のみ		内訳なし		言及有		女性が先頭	
90巻	55	47	(37.9%)	31	(25.0%)	2	(1.6%)	18	(14.5%)	4	(3.2%)
91巻	37	33	(26.6%)	25	(20.2%)	1	(0.8%)	10	(8.1%)	3	(2.4%)
92巻	54	44	(35.5%)	26	(21.0%)	2	(1.6%)	16	(12.9%)	5	(4.0%)
	146	124	(100.0%)	82	(66.1%)	5	(4.0%)	44	(35.5%)	12	(9.7%)

注）男女以外の項目の記載は，無回答，その他，回答無し，不明，無回答による性別不明，未回答などであった。

Table 3
「心理学研究」誌における「gender/sex」の取り扱い

90巻	玉井他（2019），田村他（2019）で表にgenderの記載があった。
91巻	新見他（2020）で表にgenderの記載があり，吉野他（2020a），吉野他（2020b）で表にsexの記載があった。
92巻	宮崎他（2021）で表にsexの記載があった。

（e.g.内田・寺口・大工，2020；天井，2021）。特定のカテゴリーのサンプル数が少ない場合，解析対象とすることは困難である。しかし，これは心理学研究においてトランスジェンダーやノンバイナリーの人々が除外されてきたこと（Hyde et al.，2019）を示しており，データを除外する場合，明確な理由を記述するべきである。

また，「全体100名（女性40名）」のように，全体と1つの「性別」の人数のみを記載し暗に性別二元論を示す論文が見られた（e.g.吉野・小塩，2020a；吉野・小塩，2020b；太田・北神・厳島，2021）。これは心理学が性別二元論に加担している可能性を示唆しており，「心理学が，意図せずして性差別を助長してきた可能性は無視できない」（日本心理学会，2021）という指摘に当てはまる。

加えて，研究デザインの段階でサンプルの人数を男女同数に設定していた論文（増田・坂上・森井，2019）も見られた。これは，ノンバイナリー等多様な性の存在を無視した研究デザインであり，問題である。

解析や結果および考察での「性差」や「性別」の言及について

解析や結果および考察では約35％の論文で「性別」「性差」について言及があった[4]。逆に，約7割の論文で解析に「性別」を用いていないという結果は，プロフィール項目で「性別」を尋ねる必然性のない研究が多数派であることを示唆している。

一方で，サンプルの均質性を示すために「性別」を尋ねている可能性も考えられるが，「性別」の内訳人数が記載されていない論文（e.g.松林・三輪・寺井，2019；永井，2021）も見られた。すなわち，これは「心理学研究」誌として，「性別」を記載することの目的に一貫性が見られないといえる。さらに，「女性」と「男性」を同数にすることでサンプルが均質といえるかは疑問が残る。また，心理学領域においても性的指向や人種，階級，その他の社会的カテゴリーとのインターセクショナル（交差的）な観点を取り入れる必要性が指摘されており（Morgenroth & Ryan，2018）今後，何をもってサンプルが均質と示せるのか調査を行うことが求められる。ただし，格差解消のために「ジェンダー」という分析ツールが依然として必要であること（高橋，2022）には，注意を要する。いずれにせよ，「性別」を問うことの目的を明確にする必要性が示されたといえる。

「性別」に関する用語の順番

「女性」の次に「男性」というように「女性」が先頭に記載されている論文は全体の約1割であった[5]。APAは「性別」の記載順について10年以上前に指摘しており，これは大きな問題である。

一方で，Hiramori & Kamano（2020/2021）は，「女性」を先頭に配置することに対しほとんどの回答者が「混乱する」と答えていたことを報告している。その理由として，「『男』を先にする方がよいのでは。習慣の問題」「間違ってしまう可能性大」「もし女性が先だったら，『そういう人』が作った調査なのだなと思う」といったシスジェンダーの回答を紹介している。

土肥（2022）は，研究参加者の性別内訳を示す際に，サンプル数の多いカテゴリーを先に記載することを提案している。このように，ジェンダー・ニュートラルな観点で記載することによって，Hiramori & Kamano（2020/2021）が報告した「女性」を先頭に配置することによる混乱を減じる効果が期待できる。その場合でも「男性」を先頭に記載することになれば、暗に「男性」の優位性を意味してしまう可能性（APA，2010/2011）は排除できない。

アファーマティブアクション的に，ノンバイナリーや女性等を先頭にするのか，ジェンダー・ニュートラルな記載を行うのか，今後さらなる議論が必要である。

gender/sexの用語の用いられ方

今回の調査対象とした「心理学研究」誌の124本のうち、「gender」という用語を用いていたのは3本，「sex」という用語を用いていたのは3本であった。すなわち，「心理学研究」誌において「gender/sex」が用いられることは非常に少ないことが明らかとなった。

一方で，「gender」という用語を用いていた全

ての論文（玉井・五十嵐，2019；田村他，2019；新見・山田，2020）では，セックスを意味する「female」や「male」の記載もあり，ジェンダーとセックスの意味の混同が見られ，大きな問題である。これは同時に査読における問題点も示している。

さらに，「sex」という用語を使用した全ての論文（吉野・小塩，2020a；吉野・小塩，2020b；宮崎・鎌谷・河原，2021）で，「sex」という用語を用いた理由は記述されていなかった。安易に生得的な性差を仮定することには問題があることが指摘されており（Caplan & Caplan,2009/2010），短絡的に結果を「sex」に還元し兼ねない表現には慎重になる必要がある。ただし，吉野・小塩（a）は生物学的性別とも関連すると考えらえるボディマス指標（BMI）に関する研究であり，宮崎・鎌谷・河原では，「その他」の性別を選択した参加者を分析から除外した理由が明確に記述されていたことには注意したい。

まとめと今後の課題

「心理学研究」誌における「性別」の取り扱いについては問題が山積していた。心理学研究が性別二元論に加担している可能性や，安易な性の取り扱いが行われてきた可能性が示唆された。

心理学研究において研究協力者に形式主義的に性（別）をきくのではなく（日本心理学会，2021），「性別」を問うことの目的を明確にし，性別二元論に拠らない心理学研究の方法を検討する必要がある。安易に性を取り扱わず（高橋他，2015），丁寧な研究計画を作成し，実施する必要がある。

本研究の限界点として，3年分の論文のみが対象となっていることが挙げられる。今後，さらに対象論文を拡大し，時代による変化や他雑誌との比較により課題を整理し，検討することが求められる。また，心理学研究における「性別」の取り扱いについて提言を行わなかったことも本研究の限界点として挙げられる。さらなる議論を行い，適切な「性別」の取り扱いについての指針が期待される。

注

1　この提案は，性分化疾患，現在では「体の性の様々な発達」（difference of sex development：DSDs）と呼ばれる体の状態を持つ人々が，「半陰陽（男でも女でもない）」であるという偏見を広めないためである。DSDs当事者の大多数が女性・男性であることに疑いを持っておらず，むしろ一般的な女性・男性と認めてもらえないのではないかという不安を抱えていることが指摘されている（ヨ，2021）。

2　ここでの「性別」はセックスを指す。

3　1本の論文が複数の研究（研究1，研究２等）から構成されている場合は少なくとも1つの研究や表で男女以外の記載（その他等）があれば，「男女のみ」にカウントしなかった。なお，「全体100名（女性40名）」のように，全体と１つの「性別」の人数のみを記載した論文は，「男女のみ」を想定していると考え，「男女のみ」にカウントした。

4　今後の検討や課題，注釈のみで言及している場合はカウントしなかった。

5　研究やパラグラフにより配置の順番が異なるものでも，本文や表に一部でも「女性」が先頭で記載されていればカウントした。また讃井・島田・雨宮（2021）の「妻夫」はカウントしたがこれは異性愛規範が反映した研究である。

付　記

本研究結果の一部は，日本心理学会第86回大会にて発表された。

文　献

赤澤淳子（2022）．対人関係とジェンダー．高橋惠子・大野祥子・渡邊寛編．ジェンダーの発達科学．新曜社，pp111-124.

青野篤子（2004）．ジェンダー概念の変遷．青野篤子・赤澤淳子・松並知子編．ジェンダーの心理学ハンドブック．ナカニシヤ出版，

pp307-321.

青野篤子（2022a）．性差・性役割．高橋惠子・大野祥子・渡邊寛編．ジェンダーの発達科学．新曜社，pp39-67.

青野篤子（2022b）．「女性」とは？「男性」とは？．青野篤子・土肥伊都子・森永康子著．［新版］ジェンダーの心理学―「男女」の思いこみを科学する―．ミネルヴァ書房，pp3-34.

青野篤子・土肥伊都子・森永康子（2022）．はじめに―新しい時代に新しいジェンダー観を！．［新版］ジェンダーの心理学―「男女」の思いこみを科学する―．ミネルヴァ書房，pp ⅰ-ⅳ.

APA（2010）．*Publication manual of the American Psychological Association*（*6th ed.*）,Washington, DC．前田樹海・江藤裕之・田中建彦訳（2011）．APA論文作成マニュアル．医学書院.

APA（2022a）．General Principles for Reducing Bias．Retrieved from https://apastyle.apa.org/style-grammar-guidelines/bias-free-language/general-principles.（2022年9月22日）.

APA（2022b）．Gender．Retrieved from https://apastyle.apa.org/style-grammar-guidelines/bias-free-language/gender.（2022年9月22日）.

朝日新聞（2018）．女子はコミュニケーション力高い ある意味で男子を救うためだった 順大、不適切入試で会見 朝日新聞 2018年12月11日朝刊，38.

東優子（2017）．ジェンダーの多様性をめぐる概念の登場と変遷．女性心身医学，22，219－224.

Beauvoir，S．de.（1949）．*Le Deuxième Sexe,II : L'expérience vécue*．Gallimard．中嶋公子・加藤康子監訳（1997）．決定版 第二の性Ⅱ 体験．新潮社.

Butler,J.（1990）．*GENDER TROUBLE Feminism and the Subversion of Identity*．Routledge, Chapman & Hall, Inc．竹村和子訳（2018）．ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱 新装版．青土社.

Caplan，P．& Caplan，J．B.（2009）．*Thinking Critically about Research on Sex and Gender,3rd Editions*．Psychology Press．森永康子訳（2010）．認知や行動に性差はあるのか：科学的研究を批判的に読み解く．北大路書房.

Dale,S.（2013）．Mapping 'X': The Micropolitics of Gender and Identity in a Japanese Context．上智大学博士論文.

土肥伊都子（2022）．ジェンダー社会の変容．青野篤子・土肥伊都子・森永康子著．［新版］ジェンダーの心理学―「男女」の思いこみを科学する―．ミネルヴァ書房，pp161-190.

江原由美子（2008）．ジェンダーとは？．江原由美子・山田昌弘著．ジェンダーの社会学入門．岩波書店，pp1-8.

藤高和輝（2022）.＜トラブル＞としてのフェミニズム―「とりみださせない抑圧」に抗して．青土社.

藤高和輝（2018）．ジュディス・バトラー：生と哲学を賭けた闘い．以文社.

Hiramori，D.，& Kamano，S.（2020）．Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan: Findings from the Osaka City Residents' Survey and Related Preparatory Studies．人口問題研究，76，443－446. 郭水林・小西優実訳（2021）．性的指向と性自認のあり方を日本の量的調査でいかにとらえるか―大阪市民調査に向けた準備調査における項目の検討と本調査の結果―．人口問題研究，77，45-67.

Hyde（2005）．The gender similarities hypothesis. *American Psychologist*, 60, 581–592.

Hyde，J．S.，Bigler，R．S.，Joel，D.，Tate，C．C.，& van Anders，S．M.（2019）．The Future of Sex and Gender in Psychology: Five Challenges to the Gender Binary. *American Psychologist*，74，171–193.

飯野由里子（2007）．「クィアする」とはどうい

うことなのか？．女性学，15，78-83.
伊東秀章（1995）．セックスかジェンダーか？．心理学評論，38，441-461.
Joel，D.（2011）. Male or Female? Brains are Intersex. *Frontiers in integrative neuroscience*，5，57.：https://doi.org/10.3389/fnint.2011.00057.
上瀬由美子(2018)．セクシャリティ．北村英哉・唐沢穣編．偏見や差別はなぜ起こる？――心理メカニズムの解明と現象の分析．ちとせプレス，pp169-186.
河口和也（2003）．クィア・スタディーズ．岩波書店.
河口和也（2017）．男女二元制への対応．科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループ編（2017）．全国自治体における性自認・性的指向に関連する施策調査（2016年4月～7月実施）報告書，pp56-59．Retrieved from :http://alpha.shudou.ac.jp/~kawaguch/seisaku_chousa.pdf.（2022年9月22日）.
風間孝（2018）．セクシャリティを捉える視点．風間孝・河口和也・守如子・赤枝香奈子著．教養のためのセクシャリティ・スタディーズ．法律文化社，pp1-15.
LGBT法連合会（2022）．内閣府の「ジェンダー統計の観点からの性別欄の基本的な考え方について」に対する声明．Retrieved from https://lgbtetc.jp/news/2744/.（2022年9月13日）.
町田奈緒士（2022）．トランスジェンダーを生きる―語り合いから描く体験の「質感」―．ミネルヴァ書房.
増田真也・坂上貴之・森井真広（2019）．調査回答の質の向上のための方法の比較．心理学研究，90，463-472.
松並知子（2018）．3つの話題提供を聞いて．伊藤裕子・加藤悠二・堀江有里・東優子・湯川隆子・松並知子．今，教育現場でLGBTの子どもたちは．教育心理学年報，57，291-301.
松林翔太・三輪和久・寺井仁（2019）．変則的挙動に対する記憶ベース方略に関する実験的検討．心理学研究，90，274-283.
Miura，A.，Yamada，Y.，Hiraishi，K.，Omi，Y.，& Oshio，A.（2018）．Opinion statement from Japanese psychologists．Retrieved from https://doi．org/10．31234/osf．io/xh7fr.（2022年9月13日）.
宮崎由樹・鎌谷美希・河原純一郎（2021）．社交不安・特性不安・感染脆弱意識が衛生マスク着用頻度に及ぼす影響．心理学研究，92，339-349.
Morgenroth，T．& Ryan，M．K.（2018）．Gender Trouble in Social Psychology: How Can Butler's Work Inform Experimental Social Psychologists' Conceptualization of Gender?．*Frontiers in Psychology*，9．：10.3389/fpsyg.2018.01320.
森永康子（2006）．心理学の研究方法から．青野篤子・湯川隆子編．フェミニスト心理学をめざして―日本心理学会シンポジウムの成果と課題．かもがわ書房，pp14-22.
永井暁行（2021）．コロナ禍の非対面授業における学生の主体的な学修態度．心理学研究，92，384-389.
内閣府（2022）．ジェンダー統計の観点からの性別欄の基本的な考え方について（案）．Retrieved from http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/wg-seibetsuran/sidai/pdf/wg07_2.pdf.（2022年9月13日）.
日本心理学会（2021）．心理学会における多様性尊重のガイドライン第1版（草案）．Retrieved from https://psych.or.jp/wp-content/uploads/2021/11/guideline.pdf.（2022年9月22日）.
新美亮輔・山田真也（2020）．顔の魅力が服の魅力評価に与える影響とその性差．心理学研究，91，94-104.
太田直斗・北神慎司・厳島行雄（2021）．機能の

知識の活性化は基本カテゴリのアクセスを経由するか．心理学研究，92，571-577.

織田暁子（2020）．福井県内における「性別欄」の現状と取組．中部教育科学紀要，20，1-16.

坂井雄貴（2022）．性の多様性についての総論．吉田絵理子総編．医療者のためのLGBTQ講座．南山堂，pp7-10.

佐々木掌子（2017）．トランスジェンダーの心理学―多様な性同一性の発達メカニズムと形成―．晃洋書店.

讃井知・島田貴仁・雨宮護（2021）．詐欺電話接触時の夫婦間における相談行動意図の規定因．心理学研究，92，167-177.

Schudson, Z. C. (2021). Psychology's Stewardship of Gender/Sex. *Perspectives on Psychological Science*, 16, 1105–1112.

Seager,J.（2018）．*The Woman's Atlas*．Myriad Editions．中澤高志・大城直樹・荒又美陽・中川秀一・三浦尚子訳（2020）．女性の世界地図―女たちの経験・現在地・これから．明石書店.

島袋海理（2022）．性の多様性教育実践をめぐる一考察：「性のグラデーション図」の三つの落とし穴に着目して．現代思想，50（4），123-131.

鈴木淳子（2006）．心理学とジェンダー．鈴木淳子・柏木惠子著．ジェンダーの心理学：心と行動への新しい視座．培風館，pp1-33.

高橋惠子（2022）．ジェンダー発達科学と課題．高橋惠子・大野祥子・渡邊寛編．ジェンダーの発達科学．新曜社，pp1-16.

高橋惠子・湯川隆子・吉本敏子・松並知子・東優子（2015）．性別二元性をどうのり超えるか―性を個人差として扱う可能性―．教育心理学年報，54，202-211.

武内今日子（2021）．「Xジェンダーであること」の自己呈示 ――親とパートナーへのカミングアウトをめぐる語りから．ジェンダー研究，24，95-112.

竹村和子（2000）．フェミニズム．岩波書店.

玉井颯一・五十嵐祐（2019）．刑罰としての排斥の容認．心理学研究，90，187-193.

田村典久・田中秀樹・駒田陽子・成澤元・井上雄一（2019）．平日と休日の起床時刻の乖離と眠気，心身健康，学業成績の低下との関連．心理学研究，90，378-388.

天井響子（2021）．青年期前期の援助評価に対する情緒的援助期待の影響．心理学研究，92，140-150.

内田遼介・寺口司・大工泰裕（2020）．運動部活動場面での被体罰経験が体罰への容認的態度に及ぼす影響．心理学研究，91，1-11.

WHO（2011）．Gender mainstreaming for health manage-rs: a practical approach. Retrieved fromhttps://www.who.int/publications/i/item/9789241501057.（2022年9月22日）.

山田苑幹（2019）．Xジェンダーを生きる―男女のいずれかというわけではない性自認をもつ人々の語りから．質的心理学研究，18，144-160.

ヨヘイル（2019）.DSDs－体の性のさまざまな発達の基礎知識と対応．葛西真記子編．LGBTQ+の児童・生徒・学生への支援－教育現場をセーフ・ゾーンにするために．誠信書房，pp68-84.

ヨヘイル（2021）．DSDs：体の性の様々な発達（性分化疾患）の新しい理解と性教育．産婦人科の実際，70，89-94.

吉野伸哉・小塩真司（2020a）．日本におけるBig Fiveパーソナリティ特性とBMIの関連．心理学研究，91，267-273.

吉野伸哉・小塩真司（2020b）．日本における外国人居住者に対する寛容性とBig Fiveの関連．心理学研究，91，323-331.

四本裕子（2022）．社会における心理学の誤用とどう向き合うか．日本心理学会編．心理学ワールド，96，pp5-8.

Young，E.（2019）．*THEY/THEM/THEIR:A Guide*

to Nonbinary and Genderqueer Identities. Jessica Kingsley Publishers Ltd. 上田勢子訳（2021）．ノンバイナリーがわかる本―heでもsheでもない、theyたちのこと．明石書店.

湯川隆子（2022）．性の発達理論．高橋惠子・大野祥子・渡邊寛編．ジェンダーの発達科学．新曜社，pp18-38.

Preliminary study of the use of “gender/sex” in The Japanese Journal of Psychology

Yuki NISHIO*, Miran LEE*, Hirono ENDO**

*Graduate School Education, Hyogo University of Teacher Education
**Hyogo University of Teacher Education

The purpose of this study was to critically examine how "gender/sex " are treated in The Japanese Journal of Psychology", an academic journal of the Japanese Psychological Association. In the 124 articles published in Volumes 90 (2019) to 92 (2021) of the Journal, the authors investigated (1) the way of describing "gender/sex " about the samples, (2) whether the influence or difference of "gender/sex " was mentioned in the analyses, the results, and/or the discussions, (3) the order of terms related to "gender/sex " and (4) the way of using the terms "gender/sex ". The results of the survey showed that (1) none of the papers included diverse gender terms such as non-binary, (2) 44 papers (about 35%) mentioned the influence or difference of "gender/sex ", (3) 12 papers (about 10%) had "woman/female" described first, and (4) 6 papers (about 5%) used the terms "gender" or "sex". The authors pointed out that future tasks include clarifying the purpose of asking about "gender/sex" and examining methods of psychological research that are not based on gender binary.

Key Words : the Japanese Journal of Psychology, gender binary, non-binary, gender/sex